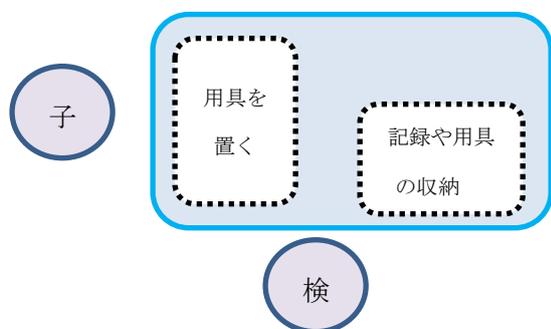


### ■ 検査机

前号では、検査を座卓とするか、椅子がある机とするかの違いについて書きましたが、今回は「机の上」のお話です。

机上の課題では、子どもに机の上でさまざまな作業をしてもらいます。つまり、机の上は子どもに作業をしてもらうためのスペースなのですが、同時に検査者が記録を取ったり、検査用具を置いておいたりする場所にもなります（子どもと大人の検査机を分ける方法もありますが、同じ机で実施するケースも少なくありません）。検査中の机のモデル図を下に示しました。

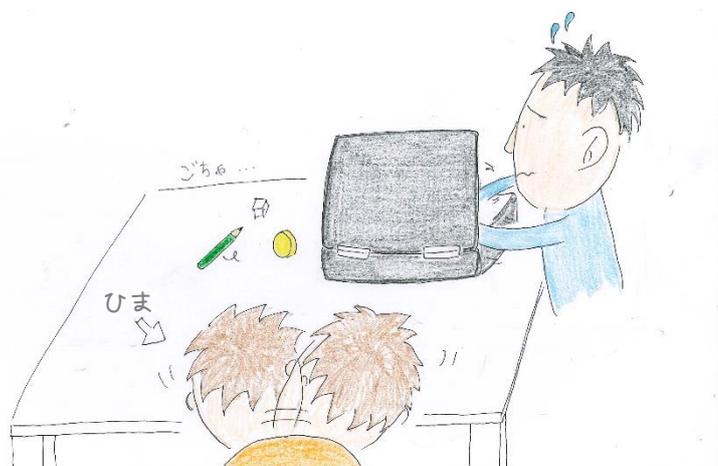


別に絶対にこの位置関係でないといけないう決まりがあるわけではないのですが、おおむねこんな位置になることが多いのではないかと思います。子どもの目の前が作業スペースで、机の上で子どもから一番離れた辺りが、記録や検査用具の収納のためのスペースになるという感じです。今は使わない検査用具が、子どもの手の届く範囲にあると自由に使い始めて提示された検査課題に意識が向かなくなったりしますし、検査者が記録をとっているのも、できるだけ目立たないようにするに越したことはないありません。

検査者によって、この辺りの場所の使い方が上手な方もおられれば、苦手な方もおられて、検査が進むにつれて机の上がゴチャゴチャになってくる…という方もおられます。ただ、これは「慣れ」の側面もありますので、一定の場数を踏み、検査者自身が検査用具の扱いに慣れてくると、一定程度改善されるものと思っています。検査用具の出し入れに手間取ると、子どもが退屈し始めたり、検査時間も間延びしたりしますの

で、検査者としては用具をいかにスムーズに扱うかという点も、地味ですが重要な点

です。では、次は検査用具を収納している「アタッシュケース」を取り上げてみます。



### ■ アタッシュケース

検査用具のセットを使ったことがある方はよくご存じと思いますが、検査用具の大半は通常は専用のアタッシュケースに収納されています。「通常は」と書いたのは機関によってはアタッシュケース以外の入れ物に収納する場合もあるからです。このアタッシュケースには全年齢用の検査用具がまとめて収納されているため、検査対象者が限定的な場合（例えば幼児さんにしか実施しない場合）、必ずしも使い勝手がよくないところがあります。そのような職場では、使う頻度の高い検査用具だけを小ぶりな入れ物に収納し直して、検査場面に持ち込んでいたりします。

まったくの余談ですが、このアタッシュケースは検査用具が一式仕舞えるだけあって、結構な大きさがあります。私は研究のために、この用具をあちこちに持ち歩いて仕事をしているのですが、重くてかさばるので、持ち運びは大変です。個人的に思っている検査用具運搬あるあるですが、

- ①複数の検査用具を車に積み込んでいると、現金輸送をしているような気分になる。
- ②朝のラッシュに持ち込むと迷惑。目だつ。見た目が厳めしいのに、赤ちゃん用の用具が中でカラコロとかわいい音を立てていて、怪訝な目を向けられる。たまに同じアタッシュケースを持った同業者を見つけると、心の中で励まし合う。
- ③蓋がしっかりとしまっていないと、持ち運びの途中で中身をぶちまけてしまうことがある。黒くアタッシュケースの中から、おもちゃのような用具がバラバラと零れ落ち、それを慌てて拾っていると周囲から不審がられる。

こんな扱いにくいアタッシュケースですが、検査場面ではアタッシュケースならではの活用もできます。アタッシュケースにはフタがありますので、フタを立てておくと目隠し代わりに使うことができます。検査用具や検査者の記録する様子が子どもの注意をそいでしまいそうな場合、フタをう

まく活用して子どもの目に入らないようにするといいかもかもしれません。

フタを立てて、検査用具が子どもの目に入らないようにして、一つずつ検査用具を提示していくと、時には子どもがアタッシュケースの方をのぞきこみに来ることがあります。慣れていない検査者の方は、つい子どもに好きなように見せてあげたり、ときにはその流れでアタッシュケースを子どもに奪取されて検査場面の主導権を失ってしまったりして、対応に困られる場面かもしれません。

このような場面でどう対応するかは、状況によりますが、基本的には検査場面の主導権を失ってしまうと、検査を完遂することは困難です。子どもの様子をよく見ながら、アタッシュケースよりも検査者が提示したものに意識が向くように働きかけることができれば、事態を打開できるかもしれません。

検査者からするとちょっと困った場面かもしれませんが、子どもの目線から考えると、このアタッシュケースがたとえばおもちゃ箱のような、いろんなものが飛び出す手品の箱のような、とても魅力的なものに見えているので…とったりもします。アタッシュケースの魅力と、子どもの『次は何か…』という期待によって、検査完了まで場を維持できていると感じることもあります。